円いひっぴい

小田実　下

円いびっぴい

小田実　下

河出書房新社

円いひっぴい下
昭和52年12月10日初版印刷
昭和52年12月15日初版発行
著者　小田実
発行者　佐藤晧三
発行所　河出書房新社
東京都新宿区住吉町九五
電話　東京355・5311編集355・5321
振替　東京0—108 02
印刷　凸版印刷
製本　凸版製本
定価は帯を御覧下さい
乱丁・落丁本は御取替え致します
©1977 Makoto Oda

円いひっぴい 下

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

三十四

一週間も経たないあいだに、円いひっぴい失踪の一件は日本じゅうに知れわたっていた。言わずと知れた、おなじみ週刊誌のおかげであります。いやはや、あっちこっちにぎやかに出たもんだと思うた。大きな見出しで派手に出た。「山崎ヨシ男、恋の失踪」というのもあれば、その恋の相手のどこやらのバーのママさんがインタビューに応じていたりする。失踪した相手のお人が大阪にいて、それでトクトクとしゃべっているというのもおかしな話ですが、週刊誌は、書く人も読む人もみんな忙しいので、そこらあたりのふしぎは、どうでもいいことになっているものらしい。大別すると週刊誌の記事は三つに分れた。これは何もわたしがやったことではのうて、そんなヒマなどわたしにはさらさらないが、課長はんがやりはったしわざやからおどろく。この人、いつも忙しい、忙しいと言うてこぼしているお人であります。それが、ある日、安井はん、話がありますねんとくだけた口調で言うと、あのなア、山崎ヨシ男の一件なア、こういうこととちがいまっか、と課長はんの推理なるものを話した。いや、そのまえに言うておきたいのは、課長はん、ヒマにまかせてかどうか知らんが、きれ

いに表をこさえてはったことです。まず、「第一表」というのがあって、それは各週刊誌の見出しの書きぬきで、そんなことは簡単なことですが、書きぬきのわきに、こまかなキチンとした字で記事の中身の要約が書いてある。これ、どなたはんが書きはりましてんとわざとのようにして訊いてやると、ボクがちょっとやってみたんですけどと、いくぶん気まりわるげに答える。気まりわるげではあるが自慢げでもあった。課長はんは報告書を書くのが得意なお人で、何かと言うと社長に報告書を書くので、「報告魔」と呼ばれているのですが、それにしても、たいへんな努力であります。山崎ヨシ男、もってメイすべきである。「第二表」というのは、「第一表」の見出しをさらに整理したもので、三つに分かれている。第一の部分は、「恋愛・情交関係」とあって、第一に出て来るのは、さっきの「山崎ヨシ男、恋の失踪」で、そのあと、「悲恋に泣いて絶望した山崎ヨシ男」とか、「山崎ヨシ男の意中の人は20歳、良家令嬢」とか、そういうたぐいの見出しがつづく。ただ、これにも、これは口頭でしたが課長はんの註釈がついていて、「悲恋」のほうがさきのほうで、あとになればなるほど、めでたし、めでたしの「恋愛・情交」になる。

二番目は、「金銭関係」でした。つまり、「アイノコ・プロ」とのイザコザであります。契約金の額でもめているのだとか、月給があれではいくらなんでも少なすぎるとか、そんなのがいろいろあって、完全なサク取ではないかと評論家というこわいお人が語っていたりする。そうかと思うと、十九かそこらの身空で、金のことをとやかく言うな、金より芸だ、芸をみがけというような木村のまわし者が書いたような記事もありました。同じ年ごろの日本国民はそんなに稼いでいないというのであります。みんな真面目に額に汗して働いている。苦しいのをじっとこらえている。芸能人よ、甘たれるな。いばるな、というので、これはわが意を得ていた。こんなのはみんな課長はんの書きはった見出しの註釈で知ったわけですが、最後のものなんかには、課長はんもわが意を得たと思うたのか、〇〇印を横

手につけていた。

三番目、つまり、課長はんの分類の最後いうのは「人種関係」で、これもまえの二つに劣らず数多くあった。ひと口に言ってしまえば、黒い皮膚をもった男の悩み、苦しみの話であります。その悩み、苦しみのはてに失踪——自殺も考えられるという空おそろしい記事まであった。もっとも、その記事も、「しかし、いかにもたくましい混血歌手山崎ヨシ男のことである。自殺など考えられない。彼はどんなことがあっても強くたくましく生きるにちがいない。それほどのエネルギーと若さにみちた若者なのである。好漢山崎ヨシ男よ、生きろ!!」というような結末で終っていましたから（課長はんはそこのところだけ註釈のなかに引用していた）、書いたお人もまさか山崎ヨシ男が自分で死んだりするとは考えていないにちがいない。まことに、あの男、叩きのめしても死なない男なのであります。それほどのエネルギーと若さにみちた若者なのであります。好漢山崎ヨシ男よ、生きろ!!　ワル中のワルよ、生きろ!!

ほんとうを言うと、わたしが週刊誌の記事があちこちに出はじめたときからひとつ懸念していたのは、山崎ヨシ男、たしかにクロンボの血は入っているにせよ、真実はあんなにまっ黒ではないということです。どこぞにそんなスッパ抜きが出るんやないかと怖れていた。いや、もっと正直に言うと、出れば面白いんやないかと期待する気持もたしかにあったのですが、幸か不幸か、そういう記事はどこにも出なかった。

出なかったと言えば、吉永良子が言うていたような、「浮わついた人気に溺れることなく自分を孤独のなかでたしかめるため」失踪したというような記事もどこにも出なかった。その記事のなかでは、わたし、つまり、クロンボの恩人の「安井のおじさん」も登場することになっていて、山崎ヨシ男、その恩人のおじさんと一夜、徹夜で語りあかす。おかげでクロンボ混血天才歌手も孤独のなかで自分

をたしかめることができたというわけなのですが、そんな記事はやはりあんまり調子がよすぎたせいかどこにも出なかった。吉永針金専務が女子の常でばらまくお金をケチったから誰も書いてくれなかったのかも知れませんが、とにかく、記事は出ず、したがって、わたしのところに週刊誌の記者などひとりもやって来なかった。

ヘエ、誰も来はりませんでしたかと、課長はんはびっくりしたような声を出した。安井はんのところなんか週刊誌のお人が来はってたいへんですやろと課長はんは言うのである。かぶりをふってもまだそんなことを言うているので、ほんまに山崎ヨシ男の行先なんか知りませんのやでと少し声をあらだてると、そこは気の弱い課長はんのことです、いや、べつにボクは何も安井はんを疑うとるわけやないのですとあわてて言い、それから、わたしの顔をちょっと心配げに見てから、声を低めて、ただな、このあいだから、あの木村はんな、「アイノコ・プロ」の社長のお人な、うちの社長にな、ちょくちょく会うとるらしいねん。

あれ、何やねん、キミ、知ってへんかと言うのです。木村には吉永良子という部下がいて、それはとりもなおさずうちの社の社長の部下でもあるのやから、三人が会ってもべつにふしぎはないですやないかとわたしが言うと、いや、会うているのは、木村と社長の二人だけで、二人が会うているのを吉永良子はまったく知らないでいるらしい。課長はんはここだけの話やがと前おきしてそれだけいかにも秘密を打ち明けるというような低い声でしゃべったのですが、そういう二人の会見、いや、「密会」と山崎ヨシ男の失踪には何ぞつながりはないやろか。まずもって、あの木村いう人、信用のおける人かいな。

さあ、とわたしは口ごもっていた。どないに言うたらええのか。ほんとうにどう言えばよろしいのか。まあ、やり手の人ですな、とわたしは無難なことを言うた。

うちの社長もなかなかのやり手ですが、やはり、二代目だけあって人のいいところがある。それで人のおだてにすぐのってしまうのですが、木村が何かたくらんでいるとすると、そこにウカウカ乗せられてしまうのではないか。課長はんはそこのところを案じているのだと言うた。わけも判らぬうちに水商売に手を出して、手がたい商いで知られて来た当社の看板に傷がつくと困る。なア、安井はん、そやろ。

その通りやと言うた。実際、その通りで、会社の看板に傷がつけば、ひいては、わたし自身の名誉に傷がつく。笑い者になりとうないもんです。わたしは逆に課長はんに言うてやった。なア、そうですやろ、課長はん。

木村はキミの友達なんですやろ、調べてくれるとありがたいなと、それでもう肩の重荷を下したのか、課長はんは気軽に言うた。その気軽で横柄な言い方はちょっと気にさわったが、調べてみますわとわたしはすぐ答えていた。気軽で従順な答え方であります。いかにもそういうもんやと答えてから自分で思うた。

それで、その日、早速、会社の帰りに玉造の「ジュリエット」に行ってみた。さすがにそこはそれこそ友達なんやから、じかに問いただしてみてやろうと思うたわけです。いや、友達というようなもんやない。木村はもとはと言えばわたしの部下で、それこそ上からドカンと一発くらわしてやれ、あいつには、このごろ、そうやってやったほうがよろしいなと道みち考えていた。ふしぎなもので、そんなふうに考え始めると、シャキッとからだ全体に力が入るような気がした。背筋がまた昔みたいにまっすぐに伸びて、筋肉が引きしまって、気合い班長の昔にかえったというわけであります。歩き方まで変って来た感じで、わたしは玉造の駅前でバスを降りて商店街にむかって歩きながら、いつのまにか、イチ、ニッ、イチ、ニッと歩調をとっていた。

しばらくぶりに行ってみると、「ジュリエット」はきれいに改装されていました。ショウ・ウインドなんか、見ちがえるようなものになっていて、浦松に返すべきお金で改装したのにちがいないのですが、小シャクなのは、「みなさまのジュリエット、いよいよお待ちかねの西宮進出」という、なかなか趣味のよい小さなビラが、ショウ・ウインドにちゃんと「西宮」という漢字のかたちになるように何枚もつづけてはりつけられていて、これはなかなかうまい考えやと思うた。人間、お金が入って来ると、考えることもましになって来るのですやろか。それとも、お金出して、誰ぞセンスのよろしい人を使うているのですやろか。考えてみると、何から何までお金のことに結びついているみたいで、いやになった。貧すれば鈍すということばがあるが、その逆もあるのですやろか。

ただ、木村の女房はあいかわらずでした。お金がたんまり入ったところで、人間、とたんに美人になるわけではない。それにまえまえからあんまり愛想のええ人やなかったのですが、その日はのっけからケンのある感じでした。木村でっか、木村はいまへんでと、わたしの顔をろくに見もしないで言う。いつ帰って来はりますねんと訊くと、さあ、あと四日もしたら帰って来ますで。

どこへ行きはりましてんとわたしはあくまで下手に出た。グアムですねんと、木村の女房はちょっと得意げになった。グアムははじめガムときこえて、何でチューインガムがこんな話のなかに出て来るんやろかと冗談でなくわたしは思うたんですが、今をはやりのグアムとは、木村もたしかに金まわりがよくなったものと見えた。それで、すぐ、遊びに行きはりましたんか、よろしますなと言うと、仕事やと言うてはりましたけどなと木村の女房のまたつっけんどんな言い方が返って来た。

「仕事いうたら、どんな仕事ですねん。」

わたしは木村の女房の「はりましたけどな」を無視して訊ねていました。その「はりましたけどな」に首を突っ込むとろくなことにならない。五十年の人生経験がそんなふうに告げていまして、わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

たしはその忠告にただちに従ったわけであります。木村の女房が何にも答えようとしないので、わたしは同じ問をくり返し、それから、趣味と実益を兼ねて行きはったというわけですかとどうでもええようなことばをつけ加えた。

そのどうでもええようなことばが効果をもたらしたのか、木村の女房は、さあ、何ですやろか、うちら、このごろ、あの人のやってはること、よう判りませんねんとため息をつくようにわたしの問に答えた。そのため息には応じようがない。それで、そやけど、この店なんかきれいになりましたんやないか、きれいなもんようけ飾りはってと、またどうでもええようなことばを言うた。口から出まかせを言うているみたいですが、人間、ふだん言うていることの半分はそんなものやないですか。そういうので世の中はなりたっている。おかげで、木村の女房はまた口をきいた。早速、お世辞に反応しよったわけであります。今度なア、西宮に店出しましたんやで。

「芦屋にも出しはるいうことでんな。」

わたしはお世辞をつづけていました。

「木村はん、ほんまにえらいやり手や。」

まあ、何か冷やこいもんでも、ということにたちまちなった。店の奥まで連れて行かれたのですが、ひそかに期待していたんは、あのピンクやら黒やら黄やらムラサキやらベージュやらのふわっふわっとしたものの堆積の横手に行けるんやないかということです。わたしがときどき木村の店に行きたくなるのは、白くぬったしゃれた台の上のそういうスベスベした、やわらかいものの堆積の横手に腰を下せるという期待があるからで、べつに木村の顔を見たくなったためではない。夜、トシ子を抱いていてにわかに元気がないようになったときでも、そういうもんやら何やら、木村の店においてあるような色っぽい品物を思い浮かべると、わたしはふしぎに元気が出て来る。それで、うまく行くように

なる。
しかし、冷やこいもんはコカコラで、喉が乾いていたもんやから、それは大いによかったが、横手の品物はなかった。白ぬりの台をどこぞへもって行ってしもうたらしい。わたしは両手で冷たいコカコラのコップをにぎりしめながら何くわぬ顔でその色とりどりの品物の行方を探していたが、見つけ出すことはできなかった。そのあいだ、木村の女房は、ひとりでまくしたてていた。このごろ、木村がおかしいというのです。西宮と芦屋に店を出すということまではよかったが、このごろ、何を血迷ったか、不動産のほうにまで手を出すようになった。つまり、土地です。土地をあちこち買い出すようになった。
「ようそんなお金がありますねんな。」
わたしは精いっぱいの皮肉をこめて言うたのですが、木村の女房は、そこのところは、あの人、ほんまにやり手ですねんと無邪気に自慢顔になった。ようやりはるないうて、感心してますねん。
すべては、木村が、「アイノコ・プロ」というようなインチキ口入れ稼業に入り込むようになったからだと、木村の女房は口をとんがらかせた。うち、ほんま言うたら、こないなこと言うたら失礼やと思いますねんけど、安井はんをうらんでますのんやでと、意外なことを言い出すので、訊きただしてみると、木村という男はほんとうに抜け目のないワルやと思うのですが、木村の女房には、わたしが「アイノコ・プロ」の社長になってくれと頼み込んだと言うているというんです。開いた口がふさがらないとは、まさにこういうこととちがいますやろか。親代りになってやっている山崎ヨシ男のプロダクションや、なんとか、よろしうやったってんかと、わたしは木村に両手をあわせて頼んだ。
「話が逆やがな。」
「何が逆ですねん。」

木村の女房はムキになっていた。これほど短気な女子やとはわたしは思わなかったのですが、やはり、このところ、木村の行状で気が立っているのですやろ、こういうときの女子には何を言うても無駄です。これも五十年の人生経験からわり出した教訓で、わたしは話題をかえていた。つまり、その当の円いひっぴい、山崎ヨシ男はどこにいるか。どこで、どうしていよるのか。

「知りまへんで。そんなこと。」

木村の女房はまたムキになって、つっけんどんに言ったので、わたしはさらに疑いを深めた。木村がかくしているにちがいない、すくなくとも、山崎ヨシ男は木村と共謀してかくれているというわたしの推理を述べたててやったわけです。おしまいに、一言、言うてやった。この店のどこぞにかくれていよらんのか。

とたんに奇怪な図柄がわたしの頭のなかに浮かんだ。そのピンクやら黒やら黄やらムラサキやらミドリやらベージュやらのやわらかいスベスベした品物の堆積のなかに、あの大きな黒いからだがかくれているという図柄です。これはいかにもキチガイじみた図柄で、わたしは何をアホウなことを考えているんかと心のなかで自分に言うたが、図柄は眼の奥底にこびりついて離れない。そのあいだに木村の女房は態勢をとりなおしていて、山崎ヨシ男の行方でしたら、それ、わたしらこそ訊きたいことですわとあらたまった口調で言うた。まるで、東京の山の手の奥さんが話しはるような口調です。わたしもつられて、知りません、関係ないことですから、と昔セールスで何かヘマをして、ついに開きなおらなければならないときの口調に自然になっていた。

そんなことありませんやろと、木村の女房はもう大阪弁に戻っていた。おたく、山崎ヨシ男の親代りなんですやろ。保証人してはりましたんやろ。まえの奥さんがあの人のお母はんなんですやろ。木村の女房はまた切口上にまくしたててていた。知らん言うて、無責任やなア。関係ない言いはって、そ

んなの無茶や。ほんまは、おたく、そっちでかくしてはるのんとちがいますやろか。
木村は山崎ヨシ男の失踪で悩んでいたのだというのである。どこへ行ってしまったのかと、寺井や吉永針金専務といっしょに探しまわっていた。あげくのはて、過労で寝込んでしまった。心痛と疲労で見ていられないほどであった。
それなら、何でのんきにグアムなんかへ出かけたのかということになる。すぐわたしは切り返した。そういう一大事を放ったらかしにして、よくグアムくんだりまで出かけられたものだ。わたしがそう一息に言うと、痛いところをつかれたらしく、木村の女房は、しばらく口ごもってから、大切な仕事があるらしいですねんと、さっきの「仕事やと言うてはりましたけどな」とはまるっきり矛盾したことをぶつぶつぶやいた。どんな仕事ですねん。わたしはすかさず責めたてていました。ほんまにどんな仕事がグアムくんだりにありますねん。
わたしはねちっこく責めたてて、とうとう、木村のその「仕事」の中身のあらましを木村の女房の口から吐き出させたんですが、キッカケは、やはり、わたしが話の途中でさしはさんだ、誰といったいグアムへ行きはりましてんということばではなかったかと思います。それこそ、「仕事やと言うてはりましたけどな」の「はりましたけどな」の核心にふれる質問で、つまり、木村は奥さんと行った。
奥さんということばが木村の女房の口からころがり出て来たとき（実際、そんなポッコリした感じで出て来た）、わたしはたしかにドキリとしたが、同時に、まえもってそのことばを予想していたような気持になったからふしぎです。とたんに、あの水色の地の上にキラキラ光るラメの輝きの光がわたしの頭のなかの暗やみの四角い箱のなかにあざやかに射して、からだじゅうが熱くなったような、それとも逆にひえびえと凍って来たようなおかしな感じになった。
「二人で行きよったんか。」

わたしは思わず訊ね返していました。奥さんということばが木村の女房の口からころがり出たときと、わたしがその訊ね返しをしたときのあいだには、ほとんど間隔がなかったように思う。それほど、正直に言うと、わたしの問はせっぱつまっていた。それがそんなにせっぱつまっていたので、木村の女房が、二人とちがいますねん、三人ですねん、ジョニーさんがいっしょに行きはりましてんとさっきまでの切口上を取り戻して早口に答えたときに、全身からはりつめていた息が抜けたような感じになったのやないかと思います。実際、ふうっとため息が出た。どういうことやねん、それ。わたしはようやくそれだけ言うた。

「どういうこともありませんがな。」

木村の女房は落ちついていました。

「いっしょに仕事しはる言うてはりました。」

誰とやねん。

「ジョニーさん。」

そう言うてから、木村の女房はあわててわれに返ったようにつけ加えた。

「うちら、ほんまに何にも知りませんのやで。勝手にやってはりますねん。うちらに何の相談もせんとやってはりますねん。」

木村の女房はあわててそんなふうにくり返したが、わたしはそんなありふれたセリフでごまかされるような青二才ではない。おだてたり、すかしたりして、ねちねちと責めたてた。その責めたてのあげくに木村の女房の口からひとつひとつころがり出て来たのは、木村がグアムに「レジャーセンター」とか称するものをつくろうとしているということです。ホテルもあればバクチ場もあればキャバレエもあればゴルフ場もあるというこのごろはやりのやつですが、それだけなら、今日、まったくあ

りふれていて面白くもおかしくもない。木村の計画には、「ジャングル村」というのがあって、それは何かというと、一口に言えば、バンガローなのである。ジャングル内に無数に建てられるバンガローの村なのである。

バンガローには、いろんな種類のものがあると、木村の女房はもうすでにすべてができ上っているような自信にみちた口調で言うた。まず、南洋の土人が住むような、柱をおったててその上に家をのせるバンガロー。ついで、さらにそれを高みに押し上げる樹上のバンガロー。そうかと思えば、穴のなかに逃げ込んで二十何年もくらして来はった奇特なお人がいはりましたけど、あのお人の穴のような穴ぐらバンガロー。そういうのが無数にジャングルのなかにでき上って、中心に建つのが、もちろん、村役場です。ただ、それもただの村役場では面白くない。第一、人が集まって来ない。それで、日本人誰もが好きでしようがないものをそこにおく。

「何ですねん、それ。」

わたしが訊ねると、木村の女房は、待っていましたというふうに得意顔になって言うた。風呂ですねん。

つまり、「グアム温泉」というわけである。グアムに温泉が出るか、そんなことは知らない。ただ、とにかく、温泉である。温泉という名前をつければよろしい。そして、あの♨マークをおったてる。できるだけ巨大なのをおったてて、そこにネオンで「グアム温泉」。

もちろん、その温泉、ただの温泉ではない。言うなれば、「ヘルス・センター」であります。まず、風呂に入って、ゆっくり入って、それから大広間で宴会が始まって、舞台で歌が始まる。踊りが始まる。歌と踊りにあきたら、別室へ行く。そこには、いろんなゲームがあって、ユカタがけでパチンコをして、玉突きをして、さらに興がのれば、バクチ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook